



かなであむ

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

「仏法には世間の隙（ひま）をかきて聞くべし。世間の隙をあけて法を聞くべき様に思うこと、浅ましきことなり、仏法には明日という事はあるまじき」由の仰せに候。

「たとひ大千世界に、みてらん火をもすぎゆきて、仏の御名を聞くひとは、ながく不退にかなふなり」と和讃に遊ばされて候。

世の中の用事をさしおいても、仏法を聞きなさい。世俗の暮らしに暇が出来てから聞法しようなんて、あさましいことです。親鸞聖人の和讃には、火の中水の中を越えても仏法を聞く人は、決してくずれることのない宇宙大の安定を得るとおっしゃっている。それが聞法の態度で、誰も明日まで生きていくかどうかわからない身ではないか。

蓮如上人のお言葉です。

* * *

お盆やお彼岸になると、お墓や仏具の広告チラシが入ったり、報道には宗教（的）なものが増え、世間はにわかにな宗教づきまします。しかし、季節の風物のように毎年繰り返されるだけで、肝心の問題を問う姿勢が欠けています。今ブームの「終活」も、引退後の余暇に始める人が多く、これらと余り変わらないのでは

と思います。全国各地で「終活」をテーマにしたフェアやセミナーが開催されているそうです。その背景には、社会や家族の変化からの不安もあるでしょうが、そんな時代が生んだ自己決定、自己責任というものの中途半端な解釈が影響していると思われます。それは、現実には「任せる」しかない死後のことを、「人任せにしない終わり方」という商品にしたものだとも言えます。

かつては人生の節目に「活動」など必要ではなく、誰もが残された人にお任せして死んでいったのです。それが、就職も結婚も死をめぐる準備も商業ベースに乗ることによって、「活動」つまり「しなくてはならない」と煽っているようなものです。”よりよく生きる”と呼びかける「終活」のもつ問題は、肝心の死のもつ真実が置き去りにされているということなのです。

自分の死後はできる限り迷惑をかけたくないと考えるのを悪いことだというつもりはありません。しかし、死んだらすべては残された人に丸投げするしかないという覚悟できていたのものを、かえってこだわらせて商品化しているのが「終活」の大きな落とし穴であることを案じるのです。

* * *

この奏庵にご縁のある方にも、残していく親族に自分亡き後の

ことを書き残された方がおられます。それは生涯独身であったり、娘さんだけを残していくということが一番の理由ですが、そのほとんどは事務的なもので、死後のことは一切ありません。それは生きている間に自らの生き方できちんと解決されているからです。残された娘さんがお参り来られ、仏さまの前に案じることなく大らかに向かわれている姿に接するたびに、ご家族共々に死を正しく領解する日暮らしをされていた尊さを思わずにおれません。

お任せするしかない自分のいのちのことをどうしても考えてしまう我々凡夫に対して、仏教は、……何も心配することはない。人生をしっかり生きていれば、死後のことは阿弥陀様が一切面倒みてくださいますよ…と教えています。

思い通りにならないいのちは、むしろいつ、どのように死んでも、これでよし、という世界を持ってこそ間違いなく成就されたといえます。それこそが、家族があってもなくても、みな平等に得ることの出来る「安心」です。明日が分からないのは皆同じなのです。「ありがとう」と書き残すなら、生かされている今

「おかげさまで」と言えたらと思います。分かち合うものがあるなら、今分け合えばどれだけ気持ちがいいことでしょう。合掌

奏庵法座 お盆の集い

日時
7月26日(土)
午前11時～

「真宗宗歌」
阿弥陀経
法話
龍谷大学大学院
教授 早島 理 師
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

台風や大雨の情報は必要でありがたいものですが、時にはかえって不安を煽ります。そんな時には、幾多の災害も乗り越えてこられた先人のことを思えば心強いものです。

お盆という季節、仏さまに向かえばとりわけそんな思いを強くします。

今月は盆会(ぼんえ)です。法友・早島師がちょうど前日に東京での講義を終え押しかけて(本人曰く)来てくれます。久々のご縁をいただきます。どうぞお参り下さい。

お盆のお参り

全国から移り住まれた方が集まるこの首都圏では宗教習慣も様々で、旧暦で勤める方、新暦で勤める方、故郷へ帰って勤める方もおられる、それがお盆になっています。

ご家庭でのお盆のお参をご希望の方、特に新(初)盆などでお時間の指定を希望される場合は、出来るだけ早くご連絡下さいますようお願い致します。

尚、お盆期間中の当庵へのお参りは、いつお越し頂いてもお参り頂けるようになっております。期間外においでの際は、事前にご連絡下さい。

お知らせ

例年の通り、8月は「かなであん便り」「奏庵法座」はお休みさせていただきますが、仏事等の法務は通常通りお勤めさせていただきます。

下半期はお彼岸、永代経法要からはじまります。厳しい暑さに向かう候、どうぞご自愛下さい。またお元気な顔が揃うのを楽しみにいたしております。

正信偈を学ぶ

法座の前の10時くらいから共々に正信偈を学ぶ時間を持っています。お時間が許す方は少し早くお出かけ下さり、途中からでも遠慮なくご参加下さい。
(廣松)

“号泣会見”に“セクハラ発言”、そして“問題発言”……どれも言葉の問題だ。揚げ足取りで因縁をつけるような言葉狩りは問題ありと常々思っているが、政治家たちの言語力の無さには、ほとんど情けなくなる。上手いとされるのが、その昔大学で流行った(?)弁論サークルの滑舌がいいだけのもので、内容には品も味も深みもない。■人間は日頃思っていることが口に出ると言うから、政治家たちは、よほど低俗か思考が貧弱だと思われるもしかたがない。もひとつ言うなれば、それを追求する側のジャーナリストの資質、不甲斐さもある。突っ込んでほしいところはいつも肩すかしだ。「生めないのか」という最も卑劣な発言をうやむやにした責任はマスコミにあるかもしれない。■彼らは臆病なのか、気づかないのか、何かを守ろうとしているのか、はがゆさにイライラする。報道が話題性ばかりに走りがちで、同じ映像も繰り返されるたびに悪趣味に変わり恥ずかしくなる。皆が横並びに発言した側ばかりを責める立場を取れば、よけいに違う方から見てみてこそジャーナリストではないだろうか。女性議員に「そこで泣くのは逆セクハラだ」と言う記者がいてよかった。■そう言えば、川内原発の再稼働容認を発表した人、多分学者だろうが、顔も上げず小さい声でモゴモゴ。政府お抱え学者の後ろめたさがバレバレだったし、例の“STAP細胞”の学者達の責任のなすり合い会見もいや～な感じばかり。手玉に取っていた勘違いお姉ちゃん化学者の方がしたたかだったのはさすがだ。■権力者が立場を利用して悪時をはたらくのは世の常。せめてつじつま合わせくらいは「真面目」に手を尽くしておけと言いたいが、どんな業界もそんな輩ばかりでは困る。それが出来ない「〇〇バカ」も居てもらいたい。その人たちには純粋な高い志をもって愚直にやっていただいて本筋を守り、その双方がバランスよく働いて成り立つ、これが世の中だったかもしれない。また巡ってくる終戦記念日、政治家にはそのもつ意味をしっかりと咀嚼してから言葉にしてもらいたい。 Norimaru

